

恋した殿下、
愛のない婚約は今日で終わりです

エステル

ベルンディ公爵令嬢で、
アンドレアの婚約者。
豊富な魔力量を持つものの、
魔法を使えない無能令嬢。
アンドレアのために、
婚約解消を計画するが、
なぜかうまくいかなくて――？

アンドレア

ティファニエル王国の王太子。
国内随一の魔法の才能を持つが
恋愛に関しては不器用な一面を持つ。
エステルの計画に気づくと、
なぜか執着を見せ始める。

アルツィオ

エステルの婚約者候補
としてやってきた
甘いマスクの隣国の第三王子。
自由奔放で、王族らしからぬ性格。
エステルに取引を持ちかける。

リリーローズ

エルボ王子爵令嬢。
緑色の髪がコンプレックスで、
あまり人前に姿を見せることがない。
ぐいぐい迫ってくる
アルツィオに押され気味。

ユニー

アレス伯爵令嬢。
突如、魔法の才能が開花する。
アンドレアと恋仲だと噂されている。
意外とこざっぱりした性格のようで――

目次

恋した殿下、愛のない婚約は今日で終わりです

7

書き下ろし番外編 恋した彼女には敵わない

275

恋した殿下、
愛のない婚約は今日で終わりです

プロローグ 十歳の王子様と、七歳の私

その時、七歳だった私は痛すぎて、何がどう苦しいのかも分からなかったが、土を掴み、血を吐きながら誰かに声を届けようと必死だった。

「お願い……処刑は、だめ……私が……私が魔法を、使えないせいなの……」

どうか、誰か聞いて、と私は血まみれになった幼い手を伸ばした。

あれほど無力感に包まれたことはない。

「いやあああああ！」

「血がつ、公爵令嬢がたくさん血を……っ」

同じ年頃の令嬢たちが集められた王宮の華やかな茶会の場合は、一人の侵入者による魔法攻撃と地面に仰向けに倒れた私によって、悲鳴に包まれた。

パニックになつて泣き叫ぶ令嬢たち。

その中の、いったいどの家がこんなことをしかしたのか、当時の私は推測できなかった。ただ、脅すだけだと聞いたのにびっくりしただろうな、とは思った。

——王子様との婚約を辞退しろという、どこかの貴族からの脅し。

この国で唯一の王子様にしてすでに上級魔法を習得し、十歳で部隊を与えられたアンドレア・レイシー・ティファニエル殿下。想定外だったのは、その婚約者である私が、魔法を使えなかったこと。

私は、その暗殺者を憐れんだ。

「……お願い、傷つけないで……」

護衛たちが令嬢を保護する騒がしさの中、私は必死に犯人を擁護する。聞いてくれるかは分からないが、頭と口元を黒い布で隠した侵入者に騎士の誰かが斬りかかることだけは阻止したかった。

「私が魔法を使えないせいなの……ごほつ、私が……」

私を見据える男の目は、そんな、嘘だと絶望に染まっていた。

まばたきも、動くことすら忘れていたようだった。

——彼に子供はいるのだろうか？

——弟は？ もしくは自分と同じ年頃の妹は？

侵入者の攻撃魔法を受けて大怪我を負った私が思ったことは、『私のせいで暴漢が死罪になってしまふ』ということだった。

「誰か……聞いて……殺しては、だめ……」

私はあまりの出血量に今にも意識を失いそうになりながら、懇願した。
小さくて何もできない自分の手に、絶望した。

だがその時、そんな私の手を掴んだのは、私のことを嫌っている三歳年上の婚約者、アンドレアだったのだ。

「エステル」

どうして、ここに、と私は驚きを隠せなかった。

王子様が膝をついているところを見たのも初めてだった。

けれど彼に救われたような気持ちになったのは、私の勘違いだったのだ。

「だめだ。あれは、殺す」

アンドレアは、無情な一言を放った。

騎士たちがだめですと反応した。情報を聞き出さなければなりませんと大人たちが止める声が聞こえ、居合わせていた令嬢たちの泣き声が私の鼓膜を叩く。

アンドレアが、どんな顔で私を見ていたのかは分からなかった。

薄れていく視界の中、私の血がどんどん彼の白い服に移るのは鮮明に映った。

「私は平気だから……お願い、彼を……彼を助けて……」

貴族の抗争に巻き込まれて、きつと『ただ脅せばいいだけだから』と仕事を押し付けられたのだろう。

私が魔法を使えないせいだ、私が悪いのだ。

私は痛みと熱で朦朧としながら懺悔するように涙を流していた。私が泣くような令嬢だとは思わなかったのか、周りの大人達も茶会の出席者たちも動揺している空気は感じていた。



それでも男を救いたくて私はアンドレアに懇願した。

「……だめだ」

意識が薄れる中、彼が私の手を強く握る。

「君が初めて必死になって泣いた男……生き残ったら君にとって特別な男になる……俺が……生かしておけるはずがないだろう……」

アンドレアの声が遠ざかって、うまく聞こえない。

ただ、彼が私の希望なんて聞いてくれないのは分かった。

ああ、いつか彼は私のことも平気で切り捨てるのでしょうか……

私はただ魔力量だけでここにいて、アンドレアが王太子になるための道具でしかなくて――

無情に殺された名前も知らない男を見て、私はそこに、抗おうにもこの冷酷な王子様への恋心を止められない自分の憐れな未来を予感したのだった。

第一章 恋した殿下、あなたに捨てられることにしました

ティファニエル王国で、もともと生まれや立場に恵まれたエステル・ベルンディ公爵令嬢は、一番の女性になるだろうと言われた。

彼女には持つて生まれた国内第二位の魔力量のおかげで、素晴らしい未来が待っている。

——そう、今でも勘違いしている者は多い。

この国では聖女と呼ばれる、属性のない純白のとても強い魔力を持った女兒がたびたび生まれる。生まれるのは名誉なことなので、少しでもその可能性に期待して、貴族はもっぱら魔力量で結婚相手を決めた。

その次の条件として、容姿もすぐれていれば尚いい、と——

エステルはそんな文化を冷めた目で見つめていた。

（魔力があっても、魔法を使う才能がなければ宝の持ち腐れだわ）

それはエステルが何度も陰で言われた言葉であり、なんとも正しい感想だと思っている。

エステルは国内第二位という魔力量を持ちながら、魔法が使えない公爵令嬢だった。

そのせいで七歳の茶会デビューで大怪我をし、身体に大きな傷跡が残った。

しかし、十一年経った今も、魔力量の多さゆえに引き続き王太子の婚約者であり続けている。

「お嬢様も十八歳におなりなのですね。無事に成年をお迎えになり嬉しく思います。このまま健康やかにお過ごしいただきたいと使用人一同、思っているのですが……」

「……」

私室の化粧台の前に腰かけるエステルは、何も答えなかった。

今日は、させてほしいと言って久しぶりに乳母が、ミルクティー色の髪を丁寧に梳^すいてくれた。

だが言葉は続かず、静かに泣き出してしまった。

エステルが鏡越しに、深い紫の瞳を向けてその姿を目に映すと、若いメイドがその役目を代わる。

「どうしても、おやりになるのですか」

「ええ」

エステルは答えた。もう、覚悟は決まったことだ。

今日は健康体で目覚める最後の朝だった。倒れることを考えて髪飾りはせず、人目を集めないようドレスも普段より控えめなものにした。

家族は説得した。屋敷の者たちにも理解を得た。

（……私が恋した殿下、この方法でしか解決できないことを、お許しください）

逃げることを、どうか許してほしい。

エステルは窓の向こうの晴れた朝の空を見た。

もしかしたら、この目に映る最後の景色かもしれない。

そんな覚悟をして、生まれると同時に決まった結婚相手のことを思い返す——

ティファニエル王国の国民は、生まれた時に必ず魔力量の検査を受ける。

エステルは貴族だから貴族のことしか分らないが、貴族の子は成長段階でも定期的に確認する。それも魔力を重視するこの国らしいやり方だろう。

エステルは、国内第二位の魔力量を持っていた。

魔力量ランキングにより未来の王妃になることが決まった。

ちなみに第二位と第三位の間には随分と開きがある。

もちろん王太子アンドレア・レイシー・ティファニエルは、堂々の魔力量ランキング第一位であるが、使える魔法の種類である魔法数ランキングにおいても右に出るものはいなかった。

幼い頃に決まった、エステルの未来の結婚相手である。

誰もが「エステル・ベルンデイ公爵令嬢を羨ましい」と言ったが——エステルは、恋をしてからずっと惨めな思いで過ごしている。

アンドレアは、ろくな魔法を使えないエステルを嫌っていた。七歳で正式にアンドレアの婚約者となったあと、魔法学の授業を受けたものの、どんな簡単な魔法も反応しない。

『凄まじい魔力量なのに、魔法が使えないのか？』

『いや、さすがにそれはないだろう』

貴族たちのみならず庶民も噂したが、それが事実なのだと知られる、ある事件が起こった。

それは、エステルが魔力を持て余し、後ろめたく感じていた頃のことだ。

王宮での茶会で、エステルは暴漢に襲われて怪我をした。

相手もまさか、高位貴族の令嬢が自分の身を守れないとは思わなかったのだろう。

魔力量で政略結婚をする貴族にとって、できて当然の「防壁の盾」と言われている防壁魔法さえも使えず、エステルは暴漢が放った攻撃魔法により肩から胸、そして腹まで大きく裂けたのだ。

（——ああ、ごめんなさい）

崩れ落ちる刹那、暴漢の目に絶望と動揺を見てエステルは涙をこぼした。

目の前で少女が血飛沫を上げて倒れる光景は、彼にとって想定外だったのだ。

魔法が使えない分、エステルは妃教育を頑張っていた。

暴漢の乱入は、どこかの貴族の差し金だろうとは、ピンときた。公爵家を妬んだ者だろう。

エステルが魔法を使えないことを指摘し、魔法を使える別の令嬢を婚約者にしてはどうかと言う声も相次いでいた。

（貴族なら誰もが使えるはずの簡単な防壁魔法、それさえも使えなかった……）

エステルは国に『魔力量を持った子を産む』という貢献しかできないがために、アンドレアに疎まれてるのは感じていた。

でも、婚約者として彼に懇願した。

「殺さないで、お願い」

だが、アンドレアは迷いもせず暴漢をその場で処刑した。

彼はまだ十歳だった。

エステルは七歳にして、自分の婚約者となったアンドレアがその年齢で次期国王として尊敬され、そして畏^{おそ}れられている理由を知った。

そのままエステルは意識を失った。

次に目が覚めた時、彼女はアンドレアから睨まれ、絶望することになる。

「でん、か……」

高熱に悩まされた彼女がようやく目覚めて診察を受けていた時、彼はやってきた。

アンドレアは言葉もかけず去っていった。

エステルは自分の言葉を聞きたくないと言わんばかりに拒絶する背に、『未来の王妃が、聞いて呆れる』という言葉を想像させられた。

怪我の痛みが大きくて、敏感になっていたことも理由にあるだろう。

ただただショックで、涙さえ出なかった。

(……私が、魔法さえ使えたら、こんな事態になっていなかった)

彼は自分に嫌悪感を抱き、失望したのだとエステルは考えた。

彼女はすでに、あの王子様に恋をしてしまっていたから。

エステルには、肩から腹にかけて消えない裂傷痕が残った。

『こちらでやっておく、君は気にしないでいい』

見舞いだという建前でやってきた二度目の訪問で、アンドレアは痛々しく包帯が巻かれた彼女の傷については触れず、そう告げた。

そして、すぐに花束を置いて踵^{かかと}を返した。

彼にとって、婚約者というだけで事態の收拾に巻き込まれてしまったことも煩^{わづら}わしかったのかもしれない。幼いエステルはそう思った。

(手間のかかる女と、彼に思われたかもしれない……)

——私が結婚相手になったことを、後悔している。

エステルは怖くなった。

だから、できるかぎりアンドレアに迷惑をかけないように揉め事を起こさず、陰口を叩かれても聞こえないふりをしようと決めた。

アンドレアは、その後エステルが療養している一ヶ月半、訪れなかった。

誰が見ても二人の仲は冷めきっていた。

お飾りの王妃になる可能性が高いと見たのか、貴族たちも取り入るのをやめて、療養中のエステルを放っておいてくれた。

怪我のことをあれやこれやと好奇心で聞き出されるのを想像するだけで辛かったエステルはほっとしたけれど。

次の社交シーズン、エステルはようやく怪我が癒えて社交界に復帰した。

「そもそもあの二人が結婚するのかどうか分からないぞ」

あの事件から徐々にそんな噂が広がり始めた。

妃教育を立派にこなす公爵令嬢。しかしアンドレアがそんな婚約者を公務に同伴させるのは最低限の行事のみ。

二人で話す様子を見た者はいないとまで囁かれた。

やはりアンドレアは彼女と結婚する意思がないのではないか。

そんな噂が強まったのは、アンドレアの成年を祝う、二十歳の生誕式を迎えた時のことだ。

「傷跡は見えないようにしたほうがよいでしょう」

「はい……」

十七歳、妃教育も残すところ少しとなったエステルは、王宮で国王の側近の一人に注意を受けた。

王妃が付けてくれていた侍女は侮辱であると怒っていたが、エステルは事実だと受け止めた。

醜い傷を見た国民が同情で胸を痛めるのは、祝いの場に相応しくない。

その前に行われた自分の十七歳の誕生日祝いで、少し無理をして体調を崩していたが、そんな貴族たちの嫌味にも冷静に対応した。

（当日は、倒れないようにしないと）

魔法が使えないエステルには、魔法による回復があまり効かないという欠点があった。

治療期間が一ヶ月を越えたのも、傷跡が大きく残ってしまったのも、そのためだ。

彼女の魔力属性が医療系に特化していたため、エステルは一命を取りとめた。

彼女の膨大な魔力量は身体を健康的でいさせてくれるのと、傷の治癒能力を早めてくれたが、一方でもっとも効果がある魔法療法が行えない。

なんとも皮肉だ、なんとも可哀そうに、と一部の者はエステルに同情した。

身体は健康だから幸運だとエステルは思うようにしていた。

妃教育のせいで、兄に便乗して身体を鍛える計画は実行できなかったが、魔法のかかかっていない薬やハーブ療法の活用は上達した。

（パレードには出ないと）

今年も工夫をこらして傷跡を隠し、アンドレアの生誕を祝う式典とパレードに出席する覚悟をしていたのだが――

『参加しなくていい』

アンドレアから届いたのは、予想外の内容の手紙だった。

エステルは、自分など不要なのだと突きつけられた気持ちになった。

彼はエステルがパレードに出なくていい理由を、かなりの日差しと暑さがあるため、と簡潔に書いていた。

彼の誕生日は夏で、大きな傷跡を完璧に隠すとしたらやや厚着になる。

父は有り難がりつつも戸惑い、本当に大丈夫なのかと返事を送ったが、王室からきたのはアンドレアも同意したという返信だった。

『国内で王族に次ぐ強い魔力を持った女性だ。慎重に扱った方がいいだろう』
体調不良のことは把握していると国王の手紙にはあったが、エステルはアンドレアがそんなことを考えたとは思えなかった。

彼のことからエステルは体調なんて考慮も配慮もしないだろう。

嫌っているのだから『婚約者なら務めを果たせ』と考えるはず。

(大事な二十歳のタイミング……これは何かの意思表示ではないの?)

何か意味があるのだろうかと考え込み、体調がおもわしくないまま当日を迎え、エステルは式典やパレードには出席しなかった。

日が暮れた夜の舞踏会にだけ出席した。

「公爵令嬢が成年を迎えるまで、あと一年。なのに欠席させたのは、殿下が公爵令嬢を妻にしたいと考えているからではないか——」

翌日からそんな噂が一気に広まった。

エステルは女性の成人である十八歳になるまでの一年、さらに絶望の日々を過ごすことになる。

アンドレアが噂に対して何もなかったからだ。

結婚をこのまま進めるのか、解消するのかさえ口にしない。そうするとあやふやなままエステルは、彼の婚約者として過ごさなければならなくなる。

それが、つらかった。

いつ、終わりを突きつけられるのだろうかと思っても考えてしまふ。

(明日、急に婚約破棄されるのか、それとも明後日か——)

エステルは疲弊した。彼のことを考えるのが、つらい。

けれどエステルが彼のことを考えざるをえなかったのは、美しい彼に見惚れ、数回の交流と会話で恋に落ちてしまったから。

そして十年が過ぎても恋心は深くなるばかりだった。

——だからこそ、もう無理だと思った。

翌年、雪がまだ少しだけ残っていた日、エステルは十八歳を迎えた。

何も希望は抱かなかった。

結婚の話はない。現状は、変わらずだ。

恋焦がれ、想いすぎて、自分を明確に拒絶してくれないアンドレアに、エステルは疲れ果てていた。

ただ、彼が自分をいらないと言ってくれるのを待つ日々。

成人となった日から一週間が過ぎ、一ヶ月が過ぎ——

やはり彼は自分と結婚する気がないのだろうかと思ふ頃、その話は、最悪なタイミングで出てきたのだ。

魔法数第一位のアンドレアに続き、突如、第二位となった伯爵令嬢が登場した。

アレス伯爵家の、ユーニ・アレス。ピンクブラウンの髪をした可愛い令嬢だという。

エステルが成年を迎えてすぐに、ユーニの魔法の才能が開花したことが話題になったのだ。

それは王太子の婚約者であるエステルが成人したことを、皆が忘れてしまったのではないかと思うほどの盛り上がりだった。

魔力量も申し分ないうえ、突然の魔法の才能開花。

【聖女】を産める令嬢がもう一人突如現れたと、貴族たちの注目が一気に集まった。

アレス伯爵家は、我が娘は優秀な子を産めるだろうと大々的に触れ回っているようだ。

そこで王と謁見する機会を掴んだ彼は、続いてユーニを王太子と引き合わせることに成功する。

それはよくある話だったが、そこから意外な流れになる。

アンドレアがその伯爵令嬢といい感じだという噂が、あつと言う間に広まっていったのだ。

(引き合わされたあとと彼が引き続き会っているのね……魔法数が自分に続く彼女の才能を、気に入ったのかもしれない)

エステルは、疲れ果てていた。

「そう」

その話を社交の場で振られても公爵令嬢としての涼しげな微笑を崩さなかったが、気分は沈んでいた。

ずっと仕えてきたメイドたちが、心配してくれた。これまでまったく結婚の気配を匂わせなかった彼だから、女性と交流をしているというだけでかなりの注目を集めた。

アレス伯爵が娘を連れ、王宮でアンドレアも交えて茶会をしたという話もエステルの耳にまで入った。

(……私とは、社交以外では会ってくださらないのに)

エステルは、醜い感情で苦しくなった。

「うまくやっているんだろう？ お忙しいのだろうか」

父が、心配そうに様子をうかがってきたのも、エステルの心に重くのしかかった。

嘘を吐くのが、苦痛だった。

社交も、必要な公務への同行もきちんとしている。

でも、いつまで？

アンドレアが必要としていたベルンディ伯爵家の名前は、今や剣術も魔法も政でも強く支持される彼には必要ない。

(——全部、この魔力のせい)

ユーニと親しくしているアンドレアに、会いたくない。

結婚したくないのならエステルを切り捨てればいい。

社交の場でも、ユーニを連れ歩けばいい――

それでもエステルを連れるのは、魔力量のせいかな。そのせいでまだ彼の婚約者であるせいかな。ユーニの噂話で、日々神経がすり減っていく。

エステルはこんなに自分の魔力を嫌だと思ったのは、初めてだった。

（こんな、役に立たないモノ……）

これがあるせいで、アンドレアをエステルとの結婚に縛りつけてしまっている。

（これさえなかったら私は、彼と出会わずに済んだ。彼も私に縛りつけられることはなかった）

七歳で出会って、あれから十一年。

初めて会った時、この世にこんなに美しい人がいるのかと恋に落ちた。

数回の交流でどんどん懂れて、将来は彼の妻になるのかと胸をときめかせた。それが、悪かったのか。

（早めに、諦めていれば）

数年で、アンドレアへの想いは愛となった。

叶わないからこそ、どんどん膨らんだ。

妃教育が始まってそう経たないうちに見切りをつければよかったのだろう。

アンドレアがエステルを受け入れることはない、と。

当時は幼かったし反対意見も多かったから、父に頼み込めば、婚約者という立場を返上できた可能性もある。

「……私は、伯爵令嬢が羨ましいわ」

アンドレアが気にかかる、唯一の女性になれた令嬢。

エステルは彼女を恨んではいなかった。眠りにつこうと一人で横になるたび、努力しても手が届かなかったアンドレアを想った。

これから自分がどうなるのか先が見えない。

彼がどうするつもりなのかも――でも、事件が起こったあの時のような目で見られたくなくて、それを問うことさえエステルはできないでいた。

その間も、王太子と伯爵令嬢の新しい噂がどんどん出てきた。

ユーニが愛嬌のある美少女だったことも、人々の関心を集めたのだろう。

エステルとアンドレアの婚約継続の危機を察してか、伯爵令嬢は公爵令嬢と違って可愛げがあると揶揄されるようになった。

伯爵令嬢が王太子妃の有力候補なのではという噂も広がった。

肝心のアンドレアが、それを否定しないからだ。

（きつと……結婚相手を代えたいのね）

エステルは、そう推測した。

屋敷の中にいようと日々二人の噂は入ってきたが、とうに諦めているせいか、ユーニのことを耳にしても、次第に嫉妬の感情はなくなっていく。

（可哀そうな、王子様）

浮気かと家族が騒ぎ始めたが、エステルは何も言わなかった。

エステルは、魔力量のせいで自分と婚約させられた哀れな王子様だと、その頃にはアンドレアに同情していた。

明日は、収穫の季節を祝う式典が王宮で予定されているわね。
きつと、ユーニと会えるだろう。

胸がずきりと痛む。眠れるか心配になった。

（大丈夫、もう悲しむのも苦しむのも、疲れてしまったもの）

彼の前ではせめて、態度だけでも彼に相応しい公爵令嬢でいたい。

もう、終わりにするつもりでいた。

結婚相手を代えたい気持ちがあるのかどうか、エステルは明日、彼の様子で確認するつもりだ。

エステルには、王家の決定を変えることはできない。

でも——代えざるをえなくする方法なら、知っている。

（ほとんど魔法が使えない私でも、唯一できる魔法……）

皮肉にも、大怪我をしたことで、エステルはその魔法を使えるようになったのだ。それを王家もアンドレアも知らない。

（叶わないと分かっているのに、このままだと胸が苦しいくらいに、あなたのことを忘れられないの）

エステルの閉じた目から涙が、そつと流れた。

叶わない恋に、終止符を打ちたいと思っている。

もうこれ以上ぼろぼろになりたくない、というのが本音だ。

だって、もしアンドレアがエステルを正妻にしたのちに離婚すると言い出し、伯爵令嬢を娶る（めと）となったら、どうか？

——その時にはエステルは壊れてしまうだろう。

恋した人の幸せを、目の前で見せつけられるのは無理だ。

彼の前では、せめて呆れられないようにしたい。

取り乱して、恋をした彼の幸せな結婚を上辺だけでも祝福できないなんてことも、嫌だ。

（彼が気に入ったのなら、……立場も全部、伯爵令嬢にあげる）

エステルがアンドレアに与えられない安らぎや、気に掛けたいという気持ちを彼にもたらしける女性なら、言うことは何もない。

（そうしたら私は、未練なく……）

怖くて手が震えた。

明日、アンドレアと話すことを想像したせいだろうか。

それとも——この後、自分がしようとしていることのせいか。

（もしくは……この恋が、完全に終わってしまうことを……？）

もしかしたら、という浅はかな願いが、エステルを固執させているのか。

(いいえ、この国の古い婚姻の習慣を彼はよく思っていない……魔力があったとしても、国のために何もできない女性を必要としない……)

明日を迎えるにあたって、エステルは自分の感情に整理をつける。

未練は、ない。

こんな魔力は、邪魔なだけ。

エステルにとっても、そしてアンドレアにとっても――

∞・∞・∞・∞・∞

翌日のまだ太陽が出ている時間に、エステルは両親よりも先に王宮へと向かった。

「こちらへどうぞ」

身支度部屋にてメイドに丁寧に髪や肌を仕上げてもらい、用意されていた式典に相応しいドレスに着替える。

エステルのミルクティー色の髪にもよく似合う、深いオレンジを基調とした秋らしい上品なドレスだった。多く使われた白のレースや絹の飾りも美しい。

肩を隠すタイプのドレスとはいえ、開いた胸元からはどうしても裂傷痕が見えてしまう。

だからいつも通り髪は下ろし、人々の視線をそらすようにエステルの胸元に大きな宝石のネックレスを着けた。

「あら……？ 宝石の色はもつと紫寄りではなかったかしら？」

いつも準備されていたものをただ着せられるだけのエステルだったが、今回は事前の打ち合わせに普段より気を配っていた。

「こちらが用意されていたものです」

「王妃様と選んだ際に、ドレスに合うものを着合わせていたはずですが……」

首の周りを飾ったネックレスは、濃く重い藍色の輝きを放っていた。

大きな宝石の他にも同じ宝石がちりばめられていて、あまり主張しないようなドレスを選んだこともあり、浮いて見える。

「装飾品につきましては王太子殿下からご指示があったと」

え、と言葉を失った。

どうして、と思ったが、王妃に何も贈らないつもりかと言われた可能性が浮かび、考えをすぐに捨てる。

(こんなことに……意味などないものね)

エステルは姿見を見つめた。

ドレスの金の刺繍と、デザインに組み込まれた藍色のラインを見ると、アンドレアの金髪と藍色の目を見出す。

隣に立てば、誰もが彼の色だと思うことだろう。

(でも彼は、気にもしないでしょうね)

エステルが着る物になって関心はないだろう。
惨めだ。でも、もし彼が今夜はパートナーの色を取り入れることを気にしていたら？ 彼を不快にさせてしまったら？

心臓がどつとはねて緊張した。

——もう、こんなこと終わりにしたい。

繰り返し訪れる惨めさと、彼に会うことを考えた際の緊張感。

(顔を合わせる繋がりがなくなってしまうば、どんなにいいか)

けれどそう考えるたび、エステルの恋心は切ない悲鳴を上げた。彼に会えなくなってしまうことに、深い悲しみを覚える。

(表情に出しては、だめ)

楽しみですねと声をかけてくるメイドたちに、呼吸もままならず返事ができないでいると悟られてはいけない。

姿見を前にエステルは深呼吸をする。

「さあ、まいりましょう」

廊下に出ると、窓の向こうには夜が訪れていた。

扉の前で待っていた護衛騎士に先導され、長い廊下を歩く。

間もなく、向こうから数人の騎士を引き連れて歩く姿が見えた。

(あつ)

エステルは頭の中でそう呟く。

つい、足を止めてしまった。だが正しい判断ではあったと遅れて気付き、臣下の礼を取って頭を下げ、その人がやってくるのを待つ。

「わざわざいい。そんなものは、不要だ」

ありきたりな挨拶の言葉などいらない、というわけか。

降ってきた声にそんなことを思いながら、エステルはゆっくりと頭を上げる。

「……はい」

そこにいたのは、とても美しい一人の男性だった。

(——アンドレア・レイシー・ティファニエル王太子殿下)

エステルは心の中で、その人の名前を唱える。

魔法灯の光が反射してきらきらと輝く黄金色の髪。こちらを見据えた彼の瞳は、夜空のような輝きを秘めた藍色だ。

(今夜の衣装もよく似合っているわ……)

立ち止まったアンドレアの背後で揺れるのは、濃い藍色のマントだ。彼は優秀な魔法騎士でもあるから、軍服の雰囲気を取り入れた服を好んでいた。騎士を連れている姿は、圧巻だ。

二十一歳になった彼は、昨年よりまた少し身長が伸びた。

エステルは、あまり会わないせいでその変化がよく分かった。またしても、まじまじと見つめてしまう。

『殿方の身長は、二十代前半まで伸びるお方もいらつしやいますよ』
長年王宮で世話になったメイドから、そう教えられたことがある。

ただ一人いるエステルの兄は成長が早かった。彼以外の男性とは距離を置いていたエステルは、成人しても男性は身長が変化していくのかと不思議でいっぱい——

「エステル」

名前を呼ばれて、ハタと我に返る。

（……み、見すぎてしまったわっ）

恥ずかしくて顔を伏せた。

「ごきげんよう、……殿下」

挨拶不要だと先に言われていたので、少しスカートを左右から持ち上げていつも通りに『ごきげんよう』とだけ言った。

だが、名前ではなく『殿下』と呼んだ。

そばにいた護衛騎士たちの空気が戸惑い、そして緊張するのを感じた。

（婚約者として昔は彼に名前を呼ばれることが、好きだったわ）

もしかしたら最後になるかもしれないせいか、彼が自分の名前を呼んでくれて嬉しかった思い出がよみがえった。

でも同時に、エステルは自分からアンドレアと呼ぶことも、声をかけることも苦手になった。

『婚約者なのだから俺のことは名前で呼べ』

拒絶している癖に、彼はそう言ったのだ。

エステルはどうか彼を名前で呼ぶ努力をしてきたが、年々呼びづらくなった。

彼の目には婚約者として映っていないのだから、婚約者らしいことはできない。

「——行くぞ」

アンドレアはしばらく止まっていたが、エスコートのためにもう少し距離を詰めることなく、いつも通りマントをひるがえす。

「はい」

エステルは彼の少し後ろに続く。

殿下と呼んだのを否定されなかったことに胸が痛かった。

（誰も見ていないのだから、婚約者の近い距離は不要ということね）

心が、また勝手に沈んでいくのを感じた。

護衛騎士たちがいる手前、俯くわけにはいかないと視線を上げると、そこにはアンドレアの大きな背中がある。

（鍛えられてしっかりした背中……彼の背中がこんなにも、遠いわ）

これから、もっと遠くなる。

（それを確認しないと）

エステルは緊張して自分の手を握りしめた。

彼は、エステルが自分の名前を呼ばないことを咎めとがなかった。今なら、さりげなく質問できるだ

ろう。

「さ——最近、伯爵令嬢とよい感じだそうですね」

どうにか普段の落ち着いた素振りでも声をかけることができた。

「アレス伯爵令嬢のことか」

騎士たちがいることを意識してあえて名前を出さなかったのに、アンドレアがそう言っただけで珍しく肩越しに見てきた。

「それが？」

「噂を耳にただけですわ」

エステルは静かな微笑を浮かべた。

「他には？ 何か、誰かに言われたか」

珍しく問われた。

（何か言われる、とは……？）

質問というより、何か確認しているみたいだ。

エステルは、二人の関係を非難しているのか遠回しに探っているのかもしれないと考えた。

「いいえ」

「問題視はしていないと？」

「はい。王命による婚約ですから、私は従うだけです」

嘘を吐いた。

つい、言葉数が多くなってしまっただけで、エステルは視線を逃がす。意識しすぎて嫌な言い方になったと後悔したが、口は止まらなかった。

「私より、可愛げのあるお方でいらつしゃると聞きました」

嫉妬だと気付いて嫌な気持ちになった。せめて彼の前では立派な婚約者でいたくて、表情を消す。いつからだろう。レディとして感情を隠し、彼とうまく話せなくなったのは。

「ああ、君より可愛げがある」

アンドレアがふいと視線を前へと戻し、そう答えた。

移動しながらの会話は、それでしまいになった。

（やっぱり、私との結婚が嫌なのね）

エステルは胸が重くなった。ああやはり、という思いで、内臓がじわじわと痛む気がした。

（彼は伯爵令嬢みたいな子が理想なのかしら）

明るくて、ちょっとドジなところがあって、レディとして完璧ではないところがまた可愛いという評判がよく耳に入ってくる。

アンドレアが、そういう子が好みだとは知らなかった。

でも、彼だって、七歳の頃から妃教育を受けてきたエステルが、完璧な公爵令嬢ではないということを知らない。

主催者たる王が挨拶をしたのち、舞踏会が始まった。

「——続いては王太子アンドレア・レイシー・ティファニエルと、エステル・ベルンディ公爵令嬢による開幕のダンスです！」

進行役の言葉に、会場の四方から拍手が起こる。

エステルは、中央でアンドレアと向かい合っていた。曲が流れ始めると、二人は踊りだす。意識せずとも、エステルの身体は彼の手と足の動きに合わせて動いた。

感情や気持ちとは関係なく、彼と息びつたりに踊っていく。

（もう、何百と繰り返したかしら）

王子様の婚約者になったエステルは、その年に人前に立った。

初めは緊張しなかった。失敗したら、と幼い彼女には荷が重かった。

『今の君に、誰も大人の力量など求めていない』

ああ、そうだったと思い返す。

彼と踊っているのに目の前のアンドレアのことを考えないなんて、これが最後だと理解しているからだろう。

（彼が、緊張を解いてくれたの）

失敗したらアンドレアも恥をかくせいかもしれない。

でも彼のあの時の言葉は、確かにエステルを救ってくれたのだ。

身長差が大きかったから、彼がエステルに合わせて踊ってくれたことも緊張を柔らげてくれた。

八歳、九歳、アンドレアはエステルに合わせてダンスの選曲をした。

合わせてくれることが嬉しくて、彼に追いつかなければとも感じて、エステルもダンスの授業に熱を入れて――

（あなたと踊ることを、苦勞に感じたことはなかった）

リードしてくれる相手が上手であれば心配することはないと、ダンスの講師に言われたことがある。

（嫌われていると分かっているけど……）

エステルは手を繋いで身を離れたアンドレアを、真つすぐ見つめた。

（そういうちょっとした気遣いも、好きだったわ）

引き寄せる彼の手を、強引だとか強すぎるとか感じることもなかった。アンドレアのもとに戻る時、エステルは自分に羽が生えたような気持ちになる。

でも悲しいのは、見つめ合っても彼の気持ちは見えないこと。

ダンスをしていると相手と心の中で会話ができるのだと、ダンスの講師は言っていた。

それはある意味名言で、パーティーに訪れた令嬢たちが可愛らしくそれについて語り合っているのを聞いたことがある。

（いつか、あなたの気持ちが分かればと思っていた）

その『いつか』は、とうとう来なかった。

せめて握った手だけでも嫌いだと分かるように痛く、苦しくしてくれたのなら、エステルはここまで苦しまなかっただろう。

（あなたは踊り終わると、少し眉を寄せて、けれど何も言わずあとは好きにしろと言わんばかりに去っていく――）

引き留めもせず、このあとどうするかの話もない。

エステルはアンドレアから手を離れた。

彼の藍色の目に囚われまばたきを忘れる。

そういえば彼はダンス中、一度だって目をそらしていない。

（どうしてか今夜はずっと強く見つめてくる気がするけれど、きっと気のせいね。私が未練たらしいせいだわ）

音楽の終了と共に、目を合わせながら姿勢を整える。

エステルは目を伏せ、彼もそうするであろうことを想像しながら、踊った相手に敬意を示して礼を取る。

「素晴らしいダンスに拍手を！」

歓声と拍手が起こった。

このままアンドレアはいつも通り、どこかへ行くのだろう。

ダンスの時間が始まって貴族たちがやってくる中、エステルは彼を見ないまま人の波に逆らって歩き出す。脇から複数の男性に呼び止められるような声が聞こえた気がしたが、きつと近くの別の令嬢を呼んだのだろう。

これまで次のダンスを求められたことはなかった。

エステルは王子様の期待されない婚約者で、あの事件で傷物になってしまったのだから。
（気のせいかしら？）

周囲を埋めたダンスの踊り手たちの話し声でうまく聞き取れず、足を止めた。

聞き違いだったら恥ずかしいが、無視することになったら失礼だ。

ファーストダンスのあとにパートナーが周囲に遠慮するよう示さない限りは、次に踊りたいと希望してきた者と踊るのがルールである。

「エステル」

「ひゃっ」

振り返ったエステルは、手を掴んだ人を見て驚いた。

彼女の視界に飛び込んできたのはアンドレアの端正な顔だった。

「え、あ、な、なんでしょう？」

どうして、アンドレアがまだここにいるのだろう。

普段ならもうとつくに姿が見えなくなっているはずだ。驚きのあまり言葉がつかえてしまい、彼の眉間にさらに皺が寄る。

（……機嫌が悪いみたい？）

やはりエステルと踊るのは嫌だったのだろう。

「君は家族のところに行くのだろう？」

「え？　そ、そのつもりです」

なぜいつもと同じなのに、行動を確認されているのか分からない。

「もう踊る予定はない、そうだな？」

「は、はい」

エステルは左右で見守っていた若い男たちが、とほとほとダンスの輪から抜けていくのにも気付かなかった。

エステルははたと重要な可能性に思い至ってしまった。

（伯爵令嬢と踊りたいのね？）

遠ざけても情報は耳に入るのに、と困惑する。

舞踏会が始まって会場の中央に移動している時、たくさんの貴族が挨拶してきた。その中には、アレス伯爵もいた。

彼はエステルに自己紹介をし、アンドレアには「娘も交えて、またのちほど」と告げたのだ。だから、会場内にユーニがいることも分かっている。

（彼女がいるのなら、ますますこの場を離れてあげないと）

エステルは「それでは」と短く挨拶を済ませて、ダンスの場から速やかに抜けた。

アンドレアから引き留める声は聞こえなかった。

だが、歩いている最中に、エステルは彼の動きを知ることができた。

「おおっ、あれって例の伯爵令嬢だろう？」

「アレス伯爵家と殿下か」

どくんつと心臓が苦しくなった。

——嫌。

噂を聞いた時と何倍も感覚が違っていた。息が苦しくなり、エステルは必死になって家族を捜す。間もなく会場で談笑していた両親と合流した。

今すぐ帰りたいと告げたエステルに、母だけでなく父も心配してくれた。

「どうした？ 珍しいな」

「すぐにでもお話したいことが」

父の囁きに答えたエステルは過呼吸状態だった。

思い詰めた顔を見て、母が隠すように抱き締めた。妙な噂が立たないよう父がフォローしながら、すぐ係の者に頼んで兄を呼び出した。

「夜風が冷たくなっているためでしょう。傷跡が痛むというので、今夜は早めに失礼します」

父は声をかけられるたびそう返し、家族揃って会場を出た。

∞・∞・∞・∞・∞

エステルは馬車の中で、自分とアンドレアがどんな状況なのか話した。母に支えられながらぼつりぼつりと、婚約してからこれまでのことを、屋敷に着くまでずっと語っていた。

「嫁ぎ先を、変更させてください」

帰宅し、リビングでソファにそれぞれ父と母、兄とエステルが並んで腰かけたところで、彼女は用件を告げた。

紅茶の支度について確認に来た執事や、メイドたちにまで緊張が走った。

「殿下は恐らく、彼女をお選びになるでしょう」

「……まさか、そんな……殿下は我が公爵家を裏切ったのか？」

兄の言葉にエステルは小さく首を振る。

「いいえ、まだ育んでいるところだとは思いますが……彼は伯爵令嬢を気に入っていて……恋した相手を、選ぶのではないかと」

恋、と口にした際、こらえきれず涙がすーっと流れていった。

「エステル……お前、まさか……」

兄がひどく狼狽し、言葉を続けられずエステルを抱き締める。

(七歳から今までいろいろなことがあったけれど、……お兄様を驚かせたのね)

両親も初めて見たエステルの涙に驚愕している様子だった。

「殿下を慕っているのに、そんなことを言い出すなんて、ずっと一人で悩んで、苦しんでいたのか……？」

間もなく、父が慎重にそう言った。

エステルは兄をそっと離し、うなずく。

「事態が公爵家を巻き込んでしまう前に、私の嫁ぎ先を変更させてください」

「おいエステルっ、お前は どうして そう普通に話せるんだっ？」

手首を掴まれ、兄のほうを向かされた。

「お前、まだ自分が泣いているのにも気付いていないんじゃないだろうな」

「お兄様——」

「お前は十年以上も婚約者として努力した。それは殿下を心から慕っていたからだろうっ」

すると父が「やめなさいっ」と言っ て、兄の肩を掴んで止めた。

いつの間にか立ち上がり駆け寄った父と肩越しに振り向いた兄が睨み合う。けれどエステルには、兄が涙ぐんでいるのが見えた。

エステルも自分が泣いているのには気付いていた。ただ、どうにもできなかったのだ。

表情だけは、落ち着いている。

それを見ていた母が、とうとう顔を両手で覆い、泣いた。

「ごめんなさい、ごめんなさいエステル。あなたがこんなにもつらい思いでいたなんて……」

かける言葉が、見つからなかった。

こうなってしまうので、エステルは今までアンドレアのことを一切口にできなかったのだと思う。

「婚約の解消を王家から知らされたら公爵家は損害をさけられないでしょう」

泣く母の元に父が駆け寄ったのを見て、エステルは考えを切り出す。

「ですから先に、こちらで手を打ってしまえばいいと考えています」

「だが王家との婚約だ。お前を逃がすにしても、時間が――」

「いいえ。とても簡単な方法があります。私が殿下の婚約者になった理由である、魔力をなくしてしまえばいいんです」

エステルは昨夜までに練った解決策を話して聞かせた。

その方法に父と兄は驚いていた。執事たちがすぐに反対の声を上げ、母が怒って泣きながら立ち上がる。

「あなたにそんなことはさせられません！　我が国の全員が魔力を持っているのは、生きるためにも必要だからですよ!？」

「他国ではほとんど魔力を持たない者だっています。私の身体に……一パーセントでも魔力を残せばいいのです」

そうすれば心臓は止まりません、なんてことは言えなかった。

父が母を宥める。

「お前に魔力操作はできないだろう」

「危険だ、考え直せ」

ソファの上にいる兄の拳が、硬く握り締められる。

こんなに兄から睨まれたことはなく、エステルは恐怖を覚えた。

でも、怒りではないと分かっている。

「エステル、お前は自分の命を懸けてまで公爵家を救わなくていいんだ。それは跡取りの俺がすべきことだ」

「私がこの魔力をなくしてしまいたいのです。……どう言い訳しようとも、国内第二位の魔力を持ったままでは、私は自由になれないでしょうから」

エステルは胸が痛くて、皮肉な笑みを浮かべた。

「私には魔法が使えません。そのうえ魔力までなくせば、結婚相手としての価値はなくなり縁談などなくなるはずです。そうすれば私は……お兄様たちに話したように、この国の利益になる他国に嫁ぐことになるでしょう」

すると父が、難しそうな顔でがりがりと頭をかいた。

「うーむ、お前が未練を捨てて外国に行きたいのはよく分かる。だが……そうなるかなあ……エステルよ、お前は、お前が思っている以上に人気が――」

「そうだなっ、国内の男共にお前は合わないっ」

突然、兄がエステルに賛成だというように言った。

「未婚の俺の同級生から連絡があらうとも無視しろ」

「お前は私情が入っているな……」

エステルはきょとんとしたが、涙目で震えている母が気になった。

「私が裂傷を受けた時、私を生かしたのは医療系に特化した私自身の魔力だったでしょう？　もし計画が成功すれば、婚約は問題なく解消へと進められます」

「お前を放っておいた殿下へ復讐も叶うわね」

「え？」

エステルは、目をぱちくりとした。

温厚な貴婦人たる母の口から『復讐』という言葉、そして低い声色が出たのは、気のせいだろうか。

「殿下のお心は知りませんが、教養さえ全然足りない伯爵令嬢を妃にして困るのは殿下自身でしょう。この際、お前が言っていた以上に世間の目を利用し、責任を取るため娶らせてしまえばよいのです」

「お、お母様？」

「覚悟は分かりました。死ぬかもしれない方法を選ぶほど……お前を追い込んでしまったのは私もお父様も、同罪です」

母の目から、涙が溢れて頬を伝っていった。

室内に重い沈黙が落ちる。父が手で指示を出し、メイドがハンカチで母の涙を拭った。

「はあ……仕上げて他国に嫁ぐ、か……たいしたことを考えるものだ。愛する娘とほとんど会えなくなってしまうのは私としては避けたいところだが」

「お父様、どうかお願いします」

エステルが強く見つめ返すと、父も真つすぐ見据えてきた。

「お前のことを何も察してやれなかったことを恥ずかしく思う。最後に、父としてお前を助けてや

りたい。手筈はすべて公爵家が整えよう。お前の負担が最も重いが——それでも、やるか？」

「覚悟のうえです」

あるはずの魔力を失ったら、不調をきたすだろう。

健康を手放すことになる可能性を思うと怖くなる。

（でも、王太子の婚約者という肩書きからは逃げられる）

魔力量という価値がなくなってしまうたら国内で嫁ぐことは叶わないだろう。

他国なら問題ない。そうすれば国に貢献できるし、アンドレアが別の女性と結婚する光景を見ずにいることだってできる——

「俺も、最大の協力をする」

兄が袖で目をこすり、力強くそう答えてくれた。

そしてエステルたちは、舞踏会の衣装を着替えもせず、執事たちに紅茶とつまみを用意させてそのまま家族会議へと突入した。

エステルが立てた計画を聞きながら父と母、兄が細部まで意見を出し合い、夜が更けていく中で計画は完璧なものへと仕上げられた。

「私が唯一できる【魔力放出】は、ほぼ魔力暴走に等しいのことですが、医療を専門とする方々の監督のもとで行えば、魔力がすべて出切ってしまうリスクを回避できると思うのです」

「だが、大病院が協力すると思うか？」

父が動けば目立つので、説得と交渉は兄とエステルが担当することになる。

「お兄様、問題ありませんわ。パカル院長を利用するようで申し訳ないのですが……私の魔力量なら大病院のすべての患者をまかなえるでしょう。治療率は百パーセント、こちらからの提案は断れないでしょう」

夜が更けた頃、明日の予定が決まり家族会議は終わった。

∞・∞・∞・∞・∞

——筋書きは、こうだ。

エステルは王太子と伯爵令嬢との噂で錯乱し、外に飛び出してしまふ。

たどり着いた先は偶然にも医療機関だった。エステルはそこで助けられたものの、魔力暴走を起こしてしまい、魔力をほとんど失うという大事件が起こる。

けれど暴走により医療機関にいた患者は全員治療されてしまい、公爵家は感謝される。

【治療魔法の禁術。魔力移植による、難病の消滅】

医療系の魔力に属する場合にのみできる方法であり、放出した魔力を他人の体に移植することでどんな病も治療する。しかし、膨大な魔力量を消費することから昔に禁じられた。

『その方法によって一命を取りとめた』

『難病が完治した』

それらの記録は医師の魔力暴走、命を懸けた治療、希に現れる魔法医療の大魔法使いによる偉業として数少ない記録が残されている。

だが、実のところエステルは同じ現象で死の淵から戻ったのだ。

七歳の子供にあの大怪我は致命的だった。エステルは出血多量で死にかけていたのだが、王宮の治療室に運び込まれた時に医療専門の魔法使いたちは驚いたという。

血液が不足し、肉体を損傷したエステルだったが、膨大に放出された自らの魔力がそれらの代わりを成し、生命を維持しようとしていた。

『お嬢様が助かったのは【魔力放出】によるものです。魔力操作も行えないのに【魔力放出】を行使できるなど不思議なことですが……膨大な量の魔力が動くのですから、魔力暴走のようなものです』

『——そして、この力については黙っていたほうがよいと思っています』

彼らはエステルの身を案じた。

『周りが知ればいつか何かあった際、お嬢様の命を使って国にとって有益な者を生き延びさせることも、生き永らえたい者がお嬢様を狙う可能性も出てくるかと——』
それを聞いた父は、家族だけの秘密にしようと言った。

∞・∞・∞・∞・∞